

少女病

田山花袋

青空文庫

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木よよぎの電車停留場の
 崖がけした下を地響きささせて通るころ、千駄谷せんだがやの田畝たんぼをてくてくと歩
 いていく男がある。この男の通らぬことはいかな日にもないので、
 雨の日には泥濘でいねいの深い田畝たんぼみち道に古い長靴ながぐつを引きずっていく
 し、風の吹く朝には帽子を阿弥陀あみだにかぶつて塵埃じんあいを避けるよう
 にして通るし、沿道の家々の人は、遠くからその姿を見知って、
 もうあの人を通ったから、あなたお役所おそとが遅おそくなりますますなどと春
 眠いぎたなき主人を揺り起こす軍人の細君もあるくらいだ。

この男の姿のこの田畝道にあらわれ出したのは、今からふた月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作がかなたの森の角、こなたの丘の上にでき上がって、某少将の邸宅、某会社重役の邸宅などの大きな構えが、武蔵野のなごりの櫟の大並木の間からちらちらと画のように見えるころであつたが、その櫟の並木のかなたに、貸家建ての家屋が五、六軒並んであるというから、なんでもそこらに移転して来た人だろうとのもつぱらの評判であつた。

何も人間が通るのに、評判を立てるほどのこともないのだが、淋しい田舎で人珍しいのと、それにこの男の姿がいかにも特色があつて、そして驚の歩くような変てこな形をするので、なんともいえぬ不調和——その不調和が路傍の人々の閑な眼を惹くもとと

なつた。

年のころ三十七、八、猫背ねこぜで、獅子鼻ししばなで、反齒そつばで、色が浅黒く
ツて、頬髯ほおひげが煩うるさそうに顔の半面を蔽おほつて、ちよつと見ると恐
ろしい容貌ようぼう、若い女などは昼間出逢であつても気味悪く思うほどだ
が、それにも似合わず、眼には柔和なやさしいところがあつて、
絶えず何物を見ても憧あこがれているかのように見えた。足のコンパス
は思い切つて広く、トツトと小きぎみに歩くその早さ！ 演習に
朝出る兵隊さんもこれにはいつも三舎を避けた。

たいてい洋服で、それもスコツチの毛の摩すれてなくなつた鳶とびい
色の古背広、上にはおつたインバネスも羊羹色ようかんいろに黄ばんで、
右の手には犬の頭のすぐ取れる安ステッキをつき、柄がらにない海老えびち

茶色やいろの風呂敷包ふろしきみをかかえながら、左の手はポケットに入れて
いる。

四ツ目垣よめがきの外を通りかかると、

「今お出かけだ！」

と、田舎の角の植木屋の主婦が口の中で言った。

その植木屋も新建ちの一軒家で、売り物のひよろ松かしやら檜かやら
黄楊つげやら八ツ手やらがその周囲にだらしなく植え付けられてある
が、その向こうには千駄谷の街道を持っている新開の屋敷町が参ま
差んしとして連なつて、二階のガラス窓には朝日の光がきらきらと輝
き渡つた。左は角つのは筈はずの工場の幾棟、細い煙筒からはもう労働に
取りかかった朝の煙がくろく低く靡なびいている。晴れた空には林を

越して電信柱が頭だけ見える。

男はてくてくと歩いていく。

田畝を越すと、二間幅の石ころ道、柴垣しばがき、檜垣かしがき、要垣かなめがき、

その絶え間絶え間にガラス障子、冠木門かぶきもん、ガス燈と順序よく並

んでいて、庭の松に霜よけの縄なわのまだ取られずについているのも

見える。一、二丁行くと千駄谷通りで、毎朝、演習の兵隊が駆け

足で通つていくのに邂逅かいこうする。西洋人の大きな洋館、新築の医

者の構えの大きな門、駄菓子だがしを売る古い茅葺かやぶきの家、ここまで来

ると、もう代々木の停留場の高い線路が見えて、新宿あたりで、

ポーと電笛の鳴る音でも耳に入ると、男はその大きな体を先への

めらせて、見栄も何もかまわずに、一散に走るのが例だ。

今日もそこに来て耳を敲そてたが、電車の来たような氣勢けはいもないので、同じ歩調ですたすと歩いていったが、高い線路に突き当たって曲がる角で、ふと栗梅くりうめの縮緬ちりめんの羽織をぞろりと着た恰かつこう
好このの好いい 庇ひさし 髪がみ の女の後ろ姿を見た。鶯うぐいす 色いろ のリボン、縹し
ゆちん 珍ちんの鼻緒はなお、おろし立ての白足袋しろたび、それを見ると、もうその胸は
なんとなくときめいて、そのくせどうのこうのと言うのでもない
が、ただ嬉うれしく、そわそわして、その先へ追い越すのがなんだか
惜あしいような気がする様子である。男はこの女を既に見知つてい
るので、少なくとも五、六度はその女と同じ電車に乗ったことが
ある。それどころか、冬の寒い夕暮れ、わざわざ廻まわり路みちをしてそ
の女の家突き留めたことがある。千駄谷の田畝の西の隅すみで、櫳

の木で取り囲んだ奥の大きな家、その総領娘であることをよく知っている。眉まゆの美しい、色の白い頬ほおの豊かな、笑う時言うに言われぬ表情をその眉と眼との間にあらわす娘だ。

「もうどうしても二十二、三、学校に通っているのではなし……それは毎朝逢あわぬのでもわかるが、それにしてもどこへ行くのだろう」と思ったが、その思ったのが既に愉快なので、眼の前にちらつく美しい着物の色彩が言い知らず胸をそそる。「もう嫁に行くんだろう？」と続いて思ったが、今度はそれがなんだか侘わびしいような惜しいような気がして、「己おれも今少し若ければ……」と二の矢を継いでたが、「なんだばかばかしい、己は幾歳だ、女房もあれば子供もある」と思い返した。思い返したが、なんとなく悲

しい、なんとなく嬉しい。

代々木の停留場に入る階段のところ、それでも追い越して、
衣きぬずれの音、白おしろい粉こなの香においに胸おどを躍おどらしたが、今度は振り返りも
せず、大足に、しかも駆けるようにして、階段を上った。

停留場の駅長が赤い回数切符を切って返した。この駅長もその
他の駅夫も皆この大男に熟している。せつかちで、あわて者で、
早口であるということをも知っている。

板囲いの待合所に入ろうとして、男はまたその前に兼ねて見知
り越しの女学生の立っているのをめざとくも見た。

肉づきのいい、頬の桃色の、輪郭の丸い、それはかわいい娘だ。
はでな縞しまもの物ものに、海老茶はかまの袴はかまをはいて、右手に女持ちの細いこうも蠅も

蝠傘^{りがさ}、左の手に、紫の風呂敷包みを抱えているが、今日はリボンがいつものと違つて白いと男はすぐ思つた。

この娘は自分を忘れはすまい、むろん知つてる！ と続いて思つた。そして娘の方を見たが、娘は知らぬ顔をして、あつちを向いている。あのくらいのうちには恥ずかしいんだらう、と思うとたまらなくかわいくなつたらしい。見ぬようなふりをして幾度となく見る、しきりに見る。——そしてまた眼をそらして、今度は階段のところまで追い越した女の後ろ姿に見入つた。

電車の来るのも知らぬというように——。

この娘は自分を忘れはすまいとこの男が思ったのは、理由のあることで、それにはおもしろいエピソードがあるのだ。この娘とはいつでも同時刻に代々木から電車に乗って、牛込^{うしごめ}まで行くので、以前からよくその姿を見知っていたが、それと違ってあえて口をきいたというのではない。ただ相對して乗っている、よく肥^{ふと}った娘だなアと思う。あの頬の肉の豊かなこと、乳の大きなこと、りっぱな娘などと続いて思う。それがたび重なると、笑顔の美しいことも、耳の下に小さい黒子^{ほくろ}のあることも、こみ合つた電車の吊^{つり}皮^{かわ}にすらりとのべた腕^{うで}の白いことも、信濃町^{しなのまち}から同じ学校の女学生とおりおり邂逅してはすつぱに会話を交じゆることも、

なにもかもよく知るようになって、どこの娘かしらん？ などとその家、その家庭が知りたくなる。

でもあとをつけるほど気にも入らなかつたとみえて、あえてそれを知らうともしなかつたが、ある日のこと、男は例の帽子、例のインバネス、例の背広、例の靴くつで、例の道みちを例のごとく千駄谷の田畝にかかつてくると、ふと前からその肥った娘が、羽織りの上に白い前懸まえかけをだらしくしめて、半ば解きかけた髪を右の手で押さえながら、友とも達だちらしい娘と何ごとかを語り合いながら歩いてきた。いつも逢う顔に違つたところで逢うと、なんだか他人でないような気がするものだが、男もそう思つたとみえて、もう少しで会釈をするような態度をして、急いだ歩調をはたと留めた。

娘もちらとこつちを見て、これも、「あああの人だナ、いつも電車に乗る人だナ」と思ったらしかつたが、会釈をするわけもないので、黙つてすれ違つてしまった。男はすれ違いざまに、「今日は学校に行かぬのかしらん？　そうか、試験休みか春休みか」と我知らず口に出して言つて、五、六間無意識に歩いてくと、ふと黒い柔かい美しい春の土に、ちようど金屏風きんびょうぶに銀ピンで画かいた松の葉のようにそつと落ちてゐるアルミニウムの留針。

娘のだ！

いきなり、振り返つて、大きな声で、

「もし、もし、もし」

と連呼した。

娘はまだ十間ほど行ったばかりだから、むろんこの声は耳に入つたのであるが、今すれ違つた大男に声をかけられるとは思わぬので、振り返りもせず、友達の娘と肩を並べて静かに語りながら歩いていく。朝日が美しく野の農夫の鋤すきの刃に光る。

「もし、もし、もし」

と男は韻を押ふんだように再び叫んだ。

で、娘も振り返る。見るとその男は両手を高く挙あげて、こつちを向いておもしろい恰かつこう好をしている。ふと、気がついて、頭あたまに手をやると、留針ピンがない。はつと思つて、「あら、私、嫌いやよ、留針を落としてよ」と友達に言うでもなく言つて、そのまま、ばたばたとかけ出した。

男は手を挙げたまま、そのアルミニウムの留針を持って待つている。娘はいきせき駆けてくる。やがてそばに近寄った。

「どうもありがとう……」

と、娘は恥ずかしそうに顔を赧あかくして、礼を言った。四角の輪廓をした大きな顔は、さも嬉しそうににこにここと笑って、娘の白い美しい手にその留針を渡した。

「どうもありがとうございました」

と、再びいいねいに娘は礼を述べて、そして踵きびすをめぐらした。

男は嬉しくてしかたがない。愉快でたまらない。これであの娘、己おれの顔を見覚えたナ……と思う。これから電車で邂かい逅こうしても、

あの人が私の留針を拾ってくれた人だと思うに相違ない。もし己

が年が若くつて、娘が今少し別嬪べっぴんで、それでこういう幕を演ずると、おもしろい小説ができるんだなどと、とりとめもないことを種々に考える。聯想れんそうは聯想を生んで、その身のいたずらに青年時代を浪費してしまったことや、恋人で娶めとった細君の老いてしまったことや、子供の多いことや、自分の生活の荒涼としていることや、時勢におくれて将来に発達の見込みのないことや、いろいろなことが乱れた糸のように纏もつれ合つて、こんがらがつて、ほとんど際限がない。ふと、その勤めている某雑誌社のむずかしい編集へんしゅうちょう長の顔が空想の中にありありと浮かんだ。と、急に空想を捨てて路を急ぎ出した。

三

この男はどこから来るかと言うと、千駄谷せんだがやの田畝たんぼを越して、櫟くぬぎの並木の向こうを通つて、新建ちのりっぱな邸宅の門をつらねている間を抜けて、牛の鳴き声の聞こえる牧場、檜かしのの大樹に連なっている小径こみち——その向こうをだらだらと下つた丘陵おかの蔭かげの一軒家、毎朝かれはそこから出てくるので、丈たけの低い要垣かなめがきを周囲に取りまわして、三間くらいと思われる家の構造つくり、床の低いのと屋根の低いのを見ても、貸家建ての粗雑ぞんざいな普請ふしんであることがわかる。小さな門を中に入らなくとも、路みちから庭や座敷がすっかり見えて、篠竹しのだけの五、六本生はえている下に、沈丁花じんちようげの小さいの

が二、三株咲いているが、そのそばには鉢植はちうえの花ものが五つ六つだらしくなく並べられてある。細君らしい二十五、六の女がかいがいしく襷たすきが掛かけになつて働いていと、四歳くらいの男の児こと六歳くらいの女の児とが、座敷の次の間の縁側の日当たりの好いところに出て、しきりに何ごとをか言つて遊んでいる。

家の南側に、釣瓶つるべを伏せた井戸があるが、十時ころになると、天気さえよければ、細君はそこに盥たらひを持ち出して、しきりに洗せんた濯くをやる。着物を洗う水の音がざぶざぶとのどかに聞こえて、隣の白蓮びやくれんの美しく春の日に光るのが、なんとも言えぬ平和な趣をあたりに展ひろげる。細君はなるほどもう色は衰えているが、娘盛りにはこれでも十人並み以上であつたろうと思われる。やや旧

派の束髪に結つて、ふつくりとした前髪を取つてあるが、着物は木綿の縞しまもの物を着て、海老茶色えびちやいろの帯の末端すえが地について、帯揚げのところところが、洗濯の手を動かすたびにかすかに揺くうご。しばらくすると、末の男の児が、かアちゃんかアちゃんと遠くから呼んできて、そばに來ると、いきなり懷ふところの乳を探つた。まアお待ちよと言つたが、なかなか言うことを聞きそうにもないので、洗濯の手を前垂れまえだでそそくさと拭ふいて、前の縁側に腰をかけて、子供を抱いてやった。そこへ総領の女の児も来て立つている。

客間兼帯の書齋は六畳で、ガラスの嵌はまつた小さい西洋書籍ほんばこが西の壁につけて置かれてあつて、栗くりの木の机がそれと反対の側に据すえられてある。床の間には春蘭しゅんらんの鉢はちが置かれて、幅物は偽に

物の文ぶんちよう 晁の山水だ。春の日が室へやの中までさし込むので、実に暖かい、気持ちが良い。机の上には二、三の雑誌、硯すずりばこ箱は能代塗りの黄いろい木地の木目が出ているもの、そしてそこに社の原稿紙らしい紙が春風に吹かれている。

この主人公は名を杉田古城といて言うまでもなく文学者。若いころには、相応に名も出て、二、三の作品は**ずいぶん**喝かつさい采されたこともある。いや、三十七歳の今日、こうしてつまらぬ雑誌社の社員になって、毎日毎日通って行って、つまらぬ雑誌の校正までして、平凡に文壇の地平線以下に沈没してしまおうとはみずからも思わなかったであろうし、人も思わなかった。けれどこうなったのには原因がある。この男は昔からそうだが、どうも若い

女に憧れるという悪い癖がある。若い美しい女を見ると、平生は割合に鋭い観察眼もすつかり権威を失つてしまう。若い時分、盛んにいわゆる少女小説を書いて、一時はずいぶん青年を魅せしめたものだが、観察も思想もないあくがれ小説がそういつまで人に飽きられずにいることができよう。ついにはこの男と少女ということが文壇の笑い草の種となつて、書く小説も文章も皆笑い声の中に没却されてしまった。それに、その容貌ようぼうが前にも言つたとおり、このうえもなく蛮カラばんなので、いよいよそれが好いコントラストをなして、あの顔で、どうしてああだろう、打ち見たところは、いかな猛獸とでも闘たたかうというような風采と体格とを持つてゐるのに……。これも造化の戯れの一つであろうという評判であ

った。

ある時、友人間でその噂うわさがあつた時、一人は言った。

「どうも不思議だ。一種の病気かもしれんよ。先生のはただ、あくがれるというばかりなのだからね。美しいと思う、ただそれだけなのだ。我々なら、そういう時には、すぐ本能の力が首を出してきて、ただ、あくがれるくらいではどうしても満足ができませんね」

「そうとも、生理的に、どこか陥落ロストしているんじゃないかしらん」と言つたものがある。

「生理的と言うよりも性質じゃないかしらん」

「いや、僕はそうは思わん。先生、若い時分、あまりにほしいま

まなことをしたんじゃないかと思うね」

「ほしいままとは？」

「言わずともわかるじゃないか……。ひとりであまり身を傷つけたのさ。その習慣が長く続くと、生理的に、ある方面がロストしてしまつて、肉と霊とがしっくり合わんそうだ」

「ばかな……」

と笑つたものがある。

「だつて、子供ができるじゃないか」

と誰かが言った。

「それは子供はできるさ……」と前の男は受けて、「僕は医者に聞いたんだが、その結果はいろいろあるそうだ。はげしいのは、

生殖の途が絶たれてしまふそうだが、中には先生みちのようになるのもあるということだ。よく例があるつて……僕にいろいろ教えてくれたよ。僕はきつとそうだと思う。僕の鑑定は誤らんさ」

「僕は性質だと思ふがね」

「いや、病気ですよ、少し海岸にでも行つていい空気でも吸つて、節慾しなければいかんと思う」

「だって、あまりおかしい、それも十八、九とか二十二、三とかなら、そういうこともあるかもしれんが、細君があつて、子供が二人まであつて、そして年は三十八にもなろうというんじやないか。君の言うことは生理学万能で、どうも断定すぎるよ」

「いや、それは説明ができる。十八、九でなければそういうこと

はあるまいと言うけれど、それはいくらかもある。先生、きつと今でもやっているに相違ない。若い時、ああいうふうで、むやみに恋愛神聖論者を気どつて、口ではきれいなことを言つていても、本能が承知しないから、ついみずから傷つけて快を取るというようなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能の充分の働きをすることができなくなる。先生のはきつとそれだ。つまり、前にも言つたが、肉と霊とがしつくり調和することができんのだよ。それにしてもおもしろいじゃないか、健全をもつてみずからも任じ、人も許していたものが、今では不健全も不健全、デカダンの標本になつたのは、これというのも本能をないがしろにしたからだ。君たちは僕が本能万能説を^{いだ}抱いているのを

いつも攻撃するけれど、実際、人間は本能がたいせつだよ。本能に従わん奴やつは生存しておられんさ」と滔とうとう々として弁じた。

四

電車は代々木を出た。

春の朝は心地こころちが好い。日がうらうらと照り渡つて、空気はめずらしくくつきりと透すき徹とおっている。富士の美しく霞かすんだ下に大きい櫟くぬぎ林ばやしが黒く並んで、千駄谷せんだがやの凹地くぼちに新築の家屋の参差さんしとして連なっているのが走馬燈のように早く行き過ぎる。けれどこの無言の自然よりも美しい少女の姿の方が好いので、男は前に相

対した二人の娘の顔と姿とにほとんど魂を打ち込んでいた。けれど無言の自然を見るよりも活いきた人間を眺ながめるのは困難なもので、あまりしげしげ見て、悟られてはという気があるので、わきを見ているような顔をして、そして電いなずま光のように早く鋭くながし眼を遣つかう。誰だか言った、電車で女を見るのは正面ではあまりまばゆくつていけない、そうかと言つて、あまり離れてもきわだつて人に怪しまれる恐れがある、七分くらいに斜はすに対して座を占めるのが一番便利だと。男は少女にあくがれるのが病であるほどであるから、むろん、このくらいの秘訣ひけつは人に教わるまでもなく、自然にその呼吸を自覚していて、いつでもその便利な機会を攫つかむことを過あやまらない。

年上の方の娘の眼の表情がいかにも美しい。星——天上の星もこれに比べたならその光を失うであろうと思われた。縮緬ちりめんのす
 らりとした膝ひざのあたりから、華奢きゃしゃな藤色の裾すそ、白足袋しろたびをつまだ
 てた二三枚さんまいがさね襲せつたの雪駄、ことに色の白い襟首えりくびから、あのむつち
 りと胸が高くなっているあたりが美しい乳房ちぶさだと思つと、総身が
 搔かきむしられるような気がする。一人の肥ふとつた方の娘は懐ふところからノ
 ートブックを出して、しきりにそれを読み始めた。

すぐ千駄谷駅に來た。

かれの知りおる限りにおいては、ここから、少なくとも三人の少女が乗るのが例だ。けれど今日は、どうしたのか、時刻が後おくれたのか早いのか、見知っている三人の一人だも乗らぬ。その代わ

りに、それは不器量ぶきりょうな、二目とは見られぬような若い女が乗った。この男は若い女なら、たいていな醜い顔にも、眼が好いとか、鼻が好いとか、色が白いとか、襟首が美しいとか、膝の肥り具合が好いとか、何かしらの美を発見して、それを見て楽しむのであるが、今乗った女は、さがしても、発見されるような美は一か所も持つておらなかつた。反齒そつば、ちぢれ毛、色黒、見ただけでも不愉快なのが、いきなりかれの隣に来て座を取った。

しなのまち
信濃町

の停留場は、割合に乗る少女の少ないところで、かつて一度すばらしく美しい、華族の令嬢かと思われるような少女と膝を並べて牛込まで乗った記憶があるばかり、その後、今一度どうかして逢あいたいたいもの、見たいものと願っているけれど、今日ま

でついぞかれの望は遂げられなかった。電車は紳士やら軍人やら商人やら学生やらを多く載せて、そして飛竜のごとく駛り出した。

トンネルを出て、電車の速力がやや緩くなつたころから、かれはしきりに首を停車場の待合所の方に注いでいたが、ふと見馴れたりボンの色を見得たとみえて、その顔は晴れ晴れしく輝いて胸は躍つた。四ツ谷からお茶の水の高等女学校に通う十八歳くらいの少女、身装もきれいに、ことにあでやかな容色、美しいといつてこれほど美しい娘は東京にもたくさんはあるまいと思われる。丈はすらりとしているし、眼は鈴を張つたようにぱっちりしているし、口は緊つて肉は痩せず肥らず、晴れ晴れした顔には常に紅が漲っている。今日はあいにく乗客が多いので、そのまま扉のそ

ばに立ったが、「こみ合いますから前の方へ詰めてください」と車掌の言葉に余儀なくされて、男のすぐ前のところに来て、下げ皮に白い腕を延べた。男は立って代わってやりたいとは思わぬではないが、そうするとその白い腕が見られぬばかりではなく、上から見おろすのは、いかにも不便なので、そのまま席を立とうともしなかつた。

こみ合つた電車の中の美しい娘、これほどかれに趣味深くうれしく感ぜられるものはないので、今までにも既に幾度となくその嬉しさを^{うれ}経験した。柔かい着物が触る。えならぬ香水のかおりがする。^{あたた}温かい肉の触感が言うに言われぬ思いをそそる。ことに、女の髪の匂い^{にお}というものは、一種のはげしい望みを男に起こさせ

るもので、それがなんとも名状せられぬ愉快をかれに与えるのであつた。

市谷^{いちがや}、牛込^{うしごめ}、飯田町と早く過ぎた。代々木から乗った娘は二人とも牛込でおりた。電車は新陳代謝して、ますます混雑を極^{きわ}める。それにもかかわらず、かれは魂を失った人のように、前の美しい顔にのみあくがれ渡っている。

やがてお茶の水に着く。

五

この男の勤めている雑誌社は、
 神田^{かんだ}の錦町^{にしきちょう}で、
 青年社とい

う、正則英語学校のすぐ次の通りで、街道に面したガラス戸の前には、新刊の書籍の看板が五つ六つも並べられてあつて、戸を開けて中に入ると、雑誌書籍のらちもなく取り散らされた室の帳場には社主のむずかしい顔が控えている。編集室は奥の二階で、十畳の一室、西と南とが塞がっているので、陰気なことおびたらしい。編集員の机が五脚ほど並べられてあるが、かれの机はその最も壁に近い暗いところで、雨の降る日などは、ランプがほしいくらいである。それに、電話がすぐそばにあるので、間断なしに鳴ってくる電鈴が実に煩い。先生、お茶の水から外濠線に乗り換えて錦町三丁目の角まで来ておけると、楽しかった空想はすっかり覚めてしまったような侘しい気がして、編集長とその陰気

な机とがすぐ眼に浮かぶ。今日も一日苦しまなければならぬかなアと思う。生活というものはつらいものだとすぐあとを続ける。と、この世も何もないような厭な気になって、街道の塵埃じんあいが黄いろく眼の前に舞う。校正の穴埋めの厭なこと、雑誌の編集の無意味なることがありありと頭に浮かんでくる。ほとんど留め度がない。そればかりならまだいいが、半ば覚めてまだ覚め切らない電車の美しい影が、その侘しい黄いろい塵埃の間におぼつかなく見えて、それがなんだかこう自分の唯一の楽しみを破壊してしまうように思われるので、いよいよつらい。

編集長がまた皮肉な男で、人を冷やかすことをなんとも思わぬ。骨折って美文でも書くと、杉田君、またおのろけが出ましたねと

突つ込む。なんぞというど、少女を持ち出して笑われる。で、おりおりはむつとして、己おれは子供じやない、三十七だ、人をばかにするにも程ほどがあると憤慨する。けれどそれはすぐ消えてしまふので、懲りることもなく、艶つやつぽい歌を詠よみ、新体詩を作る。

すなわちかれの快樂というのは電車の中の美しい姿と、美文新体詩をやることで、社に在る間は、用事さえないと、原稿紙を延のべて、一生懸命に美しい文を書いている。少女に関する感想の多いのはむろんのことだ。

その日は校正が多いので、先生一人それに忙殺されたが、午後二時ころ、少し片づいたので一息吐ついてみると、

「杉田君」

と編集長が呼んだ。

「え？」

とそつちを向くと、

「君の近作を読みましたよ」と言つて、笑っている。

「そうですか」

「あいかわらず、美しいねえ、どうしてああきれいに書けるだろう。実際、君を好男子と思うのは無理はないよ。なんとかという記者は、君の大きな体格を見て、その予想外なのに驚いたというからね」

「そうですかナ」

と、杉田はしかたなしに笑う。

「少女万歳ですな！」

と編集員の一人が相槌あいつちを打って冷やかした。

杉田はむっとしたが、くだらん奴やつを相手にしてもと思つて、他方わを向いてしまった。実に癢しやくにさわる、三十七の己おれを冷やかす気が知れぬと思つた。

薄暗い陰気な室はどう考えてみても侘わしさに耐えかねて巻き煙た草ばこを吸うと、青い紫の煙がすうと長く靡なびく。見つめていると、代々木の娘、女学生、四谷の美しい姿などが、ごっちゃんになつて、纏もつれ合つて、それが一人の姿のように思われる。ばかばかしいと思わぬではないが、しかし愉快でないこともない様子だ。

午後三時過ぎ、退出時刻が近くなると、家のことを思う。妻の

ことを思う。つまらんな、年を老^とつてしまったとつくづく慨嘆する。若い青年時代をくだらなく過^とごして、今になって後悔したとてなんの役にたつ、ほんとうにつまらんアと繰り返す。若い時に、なぜはげしい恋をしなかった？ なぜ充分に肉のかおりをも嗅^かがなかった？ 今時分思つたとて、なんの反響がある？ もう三十七だ。こう思うと、気がいらいらして、髪の毛をむしりたくなる。

社のガラス戸を開^あけて戸外^{おもて}に出る。終日の労働で頭脳^{あたま}はすっかり^{つか}労れて、なんだか脳天が痛いような気がする。西風に舞い上がる黄いろい塵埃^{じんあい}、侘しい、侘しい。なぜか今日はことさらに侘しくつらい。いくら美しい少女の髪^{かみ}の香に憧れたからって、もう

自分らが恋をする時代ではない。また恋をしたいたって、美しい鳥を誘うはね羽翼をもう持つておらない。と思うと、もう生きている価値ねうちがない、死んだ方が好い、死んだ方が好い、死んだ方が好い、とかれは大きな体格を運びながら考えた。

かおつき顔色が悪い。眼の濁っているのはその心の暗いことを示して

いる。妻や子供や平和な家庭のことを念頭に置かぬではないが、そんなことはもう非常に縁故が遠いように思われる。死んだ方が好い？ 死んだら、妻や子はどうする？ この念はもうかすかになつて、反響を与えぬほどその心は神経的に陥落ロストしてしまつた。寂しさ、寂しさ、寂しさ、この寂しさを救つてくれるものはないか、美しい姿の唯一つでいいから、白い腕にこの身を巻いてくれ

るものはないか。そうしたら、きつと復活する。希望、奮闘、勉強、必ずそこに生命を発見する。この濁った血が新しくなれると思う。けれどこの男は実際それによって、新しい勇気を恢復かいふくすることができるかどうかはもちろん疑問だ。

そとほり外濠の電車が来たのでかれは乗った。びんしよう敏捷な眼はすぐ美

しい着物の色を求めたが、あいにくそれにはかれの願いを満足させるようなものは乗っておらなかった。けれど電車に乗ったということだけで心が落ちついて、これからが——家に帰るまでが、自分の極楽境のように、気がゆつたりとなる。みちばた路側のさまざまの商店やら招牌かんばんやらが走馬燈のように眼の前を通るが、それがさまざまの美しい記憶を思い起こさせるので好い心地こころちがするので

あつた。

お茶の水から甲武線に乗り換えると、おりからの博覧会で電車はほとんど満員、それを無理に車掌のいる所に割り込んで、とにかく右の扉の外に立って、しっかりと真しんちゆう鍬くわの丸棒を攫つかんだ。ふと車中を見たかれははッとして驚いた。そのガラス窓を隔ててすぐそこに、信濃しなの町まちで同乗した、今一度ぜひ逢いたい、見たいと願っていた美しい令嬢が、中折れ帽や角帽やインバネスにほとんどお圧おしつけられるようになって、ちようど鳥からすの群れに取り巻かれた鳩はとといったようなふうになって乗っている。

美しい眼、美しい手、美しい髪、どうして俗悪なこの世の中に、こんなきれいな娘がいるかとすぐ思った。誰の細君になるのだろ

う、誰の腕に巻かれるのであろうと思うと、たまらなく口惜しく
情けなくなつてその結婚の日はいつだか知らぬが、その日は呪^{のろ}う
べき日だと思つた。白い襟^{えりくび}首、黒い髪、鶯^{うぐいすちや}茶^{ちや}のリボン、白
魚のようなきれいな指、宝石入りの金の指輪——乗客が混合^{こみ}つて
いるのとガラス越しになつてゐるのを都合のよいことにして、
かれは心ゆくまでその美しい姿に魂を打ち込んでしまつた。

水道橋、飯田町、乗客はいよいよ多い。牛^{うしごめ}込^こに來ると、ほと
んど車台の外に押し出されそうになつた。かれは真鍮の棒につか
まつて、しかも眼を令嬢の姿から離さず、うつとりとしてみずか
らわれを忘れるというふうであつたが、市谷に來た時、また五、
六の乗客があつたので、押しつけて押しかえしてはいるけれど、

ややともすると、身が車外に突き出されそうになる。電線のうなりが遠くから聞こえてきて、なんとなくあたりが騒々しい。パイと発車の笛が鳴って、車台が一、二間ほど出て、急にまたその速度が早められた時、どうした機会はずみか少なくとも横にいた乗客の二、三が中心を失って倒れかかってきたためでもあろうが、令嬢の美にうつとりとしていたかれの手が真鍮の棒から離れたと同時に、その大きな体はみごとにとんぼがえりを打って、なんのことはない大きな毬まりのように、ころころと線路の上に転がり落ちた。危あぶないいと車掌が絶叫したのも遅おそし早し、上りの電車が運悪く地を撼うごかしてやってきたので、たちまちその黒い大きい一塊物は、あなやという間に、三、四間ずると引き摺ひずられて、紅あかい血が一線ひとすじ

長くレールを染めた。

非常警笛が空気を劈つんざいてけたたましく鳴った。

青空文庫情報

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月20日改版初版発行

1974（昭和49）年11月30日改版8版発行

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000年9月28日公開

2013年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

少女病

田山花袋

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>